

「教会と社会」研究会（ES研）例会（2014. 4.26（土） 於・早稲田大学戸山キャンパス）

## 14・15世紀イングランドにおける宮廷楽師の活動とその思想的背景

### <報告要旨>

早稲田大学大学院文学研究科西洋史学コース修士課程 武田 啓佑

#### 1. 序論

報告者は14・15世紀イングランドの王たちの宮廷に抱えられた楽師(minstrel)を研究している。音楽史では「音楽拠点」への着目が進み、楽師についても個別の都市における研究が蓄積されてきているが、各地域の宮廷の楽師についてはあまり扱われていない。また、14世紀以後の楽師については宮廷・都市ともに財政史料を用いた研究が主流となっており、それ以外の着目が薄い。このような研究状況から重要な問題が見過ごされている。具体的には、様々な財政記録から14・15世紀のイングランド宮廷楽師への待遇は13世紀以前よりも向上したことがわかっている（人数の増加、給金の体系化、年金による老後保障など）。しかし、こういった楽師への強力なパトロネージは、従来の研究では王権の顕示的消費の一環として位置付けられるにとどまっており、それが実現した背景にどのような事情があったのかについてはそれ以上解き明かされていないのである。報告者は、このような楽師の利用の根拠を当時の知的背景の中に求めることを試み、君主鑑 *mirrors for princes* とよばれる著作ジャンルに着目した。

#### 2. 研究史と研究状況上の問題点

本報告ではまず、中世イングランドの楽師の研究史を整理した上でそれをめぐる問題点を指摘した。E. Chambers らの研究で先鞭が付けられた楽師研究は、1960年代の R. Conklin および R. Rastall による財政史料を大幅に用いた網羅的研究で大幅に進展した。1980年代からは「声の文化から文字の文化へ」というリテラシーをめぐる議論の盛り上がりの中、楽師が詩人としての役割を失って個別の楽器の演奏者として専門化していくという学説が主張される。確かに、大陸ヨーロッパを含めた見取り図としては、都市楽師のギルドの結成、聴衆（王侯や都市民）の読書形態の変化（朗読の聴取から黙読への移行）を根拠として、楽師たちが専門化と社会的承認の獲得を並行して成し遂げたとする定説が既にできている。しかし、A. Taylor によれば16世紀においてもイングランドの楽師は個々人が多機能性を維持したまま活動する場合があります、会計史料でも楽師と役者がきちんと区別されていない事例が多々みられる。さらにはリテラシーをめぐる議論についても、「声から文字へ」の流れは従来考えられてきたほど直線的に進むわけではないという修正が進んでいるため、楽師研究の前提も問い直されている。加えて、中世盛期までの楽師の身分の扱いはヨーロッパでも各地域によって異なる可能性が高く、それ以降の展開を地域差を考慮せずに扱うことへの批判も根強い。したがって、上述の楽師の専門化をめぐるヨーロッパ規模の単線的理解は見直されるべきだろう。

この研究状況を違う角度から見ると、ディシプリン間の分裂というもう一つの問題も浮き彫りになる。例えば音楽史であれば、中世の楽師を近世的な職業音楽家の前身として捉え、文学史

であれば、詩の語り手としての側面を重視して、創作者たる詩人よりも一段劣る伝達者として捉えられるという傾向が見受けられる。楽師は多面的な存在であり、現代の学問分野の枠を超えた研究をしなければ、同時代のコンテクストに基づいてその実態を十分に明らかにすることはできない。地域ごとの実証とディシプリン間の対話という二つの課題に応えるべく、報告者は14・15世紀イングランドの宮廷楽師の総合的研究を目指しており、その一端を今回の報告で明らかにする。

### 3. 王による宮廷楽師の利用—会計史料から

以上のような前提の上で、まず報告者はイングランド王による宮廷楽師の利用状況を会計史料の分析から考察した。Rastallが用いた財政史料を中心に再検討したところ、宮廷楽師の人数は13世紀と14・15世紀で顕著な差がみられた(13世紀には10人未満だったものが14・15世紀には20人前後となる)。史料上の肩書きの揺れから、楽師とその周辺の職業(楽器を用いることがあった触れ役、見張りなど)との渾然となった状態は14・15世紀にも見られることがわかった。また従来、楽師の詩人としての役割が徐々に薄れていったことの根拠としてはハーブ奏者の減少が持ちだされてきたが、15世紀に still minstrel<sup>1</sup>が相当数見出されることから、そのような断定は避けるべきと思われる。

### 4. 14・15世紀の「君主鑑」における理想の君主像と楽師

次いで、楽師をめぐる思想的背景を探るために、「君主鑑」の分析を報告した。楽師をめぐる同時代の議論・知識人らの言説については、13世紀までのものはCasagrande & VecchioやC. Pageらの研究が蓄積されているが、14・15世紀の状況はあまり扱われていない。その中でフランスを中心に音楽と社会の関連を研究しているM. Clouzotは、楽師・道化・占星術師といった人々が王権にとって少なからぬ意義を有していたことを、当時の知識人らの議論を追いながら示唆している。このClouzotの論を念頭に置いて、中世後期イングランドで広く読まれた君主鑑において楽師がどのように評価されているかについて、三つの点から検討した<sup>2</sup>。

まず楽師に褒美を与えることの是非について考察した。12世紀の作家家にとっては、楽師に報酬を与えて宮廷に抱えることは批判の対象であった。しかし、トマス・アクィナスは節度を保った範囲でならば楽師に報酬を与えることをはっきりと肯定している。そして14世紀以降の君主鑑では、確かにおべっか使いなどの危険な存在に褒美を与えることは共通して戒められているものの、楽師をそこに含めている例はほとんどない。

次いで楽師が提供する様々な技芸(minstrelsy)の位置付けについて検討した。例えば12～13世紀にチョバムのトマスは、楽師のうち人に困難や悲しみへの慰めを与えるような歌を歌う者のみを許されるものとし、楽しい歌を歌ったり踊ったりおべっかを使ったりする楽師を断罪している。

1 中世の楽器は haut (英: loud) と bas (英: still) の二つに分類でき、前者はラッパや笛、太鼓のような音の大きい楽器、後者はハーブなどの弦楽器を中心とした静かな音の楽器である。

2 本報告で検討した著作は次の6つである: *Secretum Secretorum* (『秘中の秘』); John Lydgate and Benedict Burgh, *Secrees of Old Philisoffres* (『古い哲学者たちの秘密』); John Gower, *Confessio Amantis* (『愛する者の告白』); John Trevisa, *The Governance of Kings and Princes* (『君主の統治』); Thomas Hoccleve, *The Regiment of Princes* (『君主の統治』); *The III Consideracions right necessarye to the good governaunce of a Prince* (『君主の良い統治にまさしく必要な三つの省察』)。

しかし14世紀以降の君主鑑は、例えば『秘中の秘』に「君主の権威にとって、彼が疲れたときに、楽器やオルガンのようなもので心を楽しませてくれる私的な忠臣をもつことは好ましい。というのは、人は当然そのようなものに喜びを覚え……心配事は消え去り、体全体が強さを取り戻すからである<sup>3</sup>」とあるように、楽しみや喜びを与えてくれる楽師の意義をもう一步進んで認めている。

さらに、君主鑑は君主が先祖の事績を知ることの意義も論じている。そこでは、自らの手本として、過去の偉大な王侯の事績や敬虔さを讀んだり聴いたりして知ることが薦められている。ジョン・トレヴィザの『君主の統治』では、食事の際にそれらのエピソードを朗読するべきだと述べられている<sup>4</sup>。楽師が王侯の食事の席に伴って音楽を演奏していたことは図像資料や文学作品から確かめられるため、王侯が食べている間に楽師がそれらの話を朗読したり歌ったりしていた可能性は高い。したがって、君主鑑にみられるこの奨励は、楽師がそこにいることを前提とした上でその有効な利用を説いているものと考えられる。以上の三つの点で、君主鑑では楽師の意義が積極的に認められていることが確かめられた。

## 5. 王国の統治と楽師の技芸—楽師の社会的意義

このように君主鑑から分析することができたのは主に王個人の資質に関わる問題であったが、最後に、楽師の社会的な機能がどのように認識されていたのかについていくつかの検討を行った。まず、祝祭における楽師の利用を考察した。大きな (haut) 音を出す楽器<sup>5</sup>、見た目にも豪華な素材の楽器が使われ、楽師らは聴覚と視覚でその場の人々に強い印象を与えることに貢献した。戴冠式、婚礼、入市式、トーナメントなどの祝祭は、王と都市、王と貴族、婚姻の相手どうしなどの異なる存在どうしが共存し統合される儀式であり、そういった統合の場にこそ、一人で多くの機能を帯びていた楽師の同伴が相応しいものであった (M. Dobozy による)。第二に、楽師はその語りを通じて自身のパトロンを讃えたり、何らかの情報を伝達する役割も担った。前述のように、君主の資質を高める上でもその重要性は明らかであったが、これは同時に先祖の記憶を共有し継承していくことを通じて共通の起源をもつコミュニティが結束を高めるための手段ともなりえた。その語りは、同時代の説教師たちによれば彼らの宗教的な例話よりも強く人々の心を動かす力を持っていたという。

社会的機能の第三として、隠喩としての楽師の技芸の意味を考えておきたい。ピタゴラス以後の論者は数比によって秩序立てられた音楽が宇宙の調和を体現するものとし、プラトンやアリストテレスは音楽と美德とを結びつけるなど、古代ギリシア以来の西洋では音楽の意味が様々に論じられてきた。ボエティウスは音楽を三つに分けて論じたが、彼によれば、「宇宙の音楽」「人間の音楽」「道具の音楽」はいずれも同じ調和の原理にもとづいているという。つまり、観念的あるいは幾何学的な意味での音楽ばかりでなく、実際に耳に聞こえる音楽や歌もこの調和の原理に貫かれていると考えられていた。彼の考え方は中世を通じて広く音楽を論じる者に行き渡った。例えば『恋する者の告白』*Confessio Amantis* の序章でジョン・ガワーは、古代の伝説的なハーブ弾きアリ

3 Steele (ed.), p. 58.

4 Trevisa, p. 286.

5 註1参照。

オンに理想の王をなぞらえ、献呈先の王（リチャード2世およびヘンリ4世）に人々を仲睦まじくさせる調和の実現者になることを薦めている。また、リドゲートらが『秘中の秘』を翻訳した『古い哲学者たちの秘密』でも、楽師たちの技芸は「天の調和をもつ楽器」とともにあると書かれている<sup>6</sup>。このように、この時代の英語作品においては楽器を弾くことが世界の調和につながる行為であることが意識されており、楽師の技芸は、人間と宇宙の調和、マイクロコスモスとマクロコスモスの調和をもたらすものとして考えることができる。このことは14・15世紀の王たちの楽師パトロネージを考える上で重大な示唆をなしている。

## 6. 結論

本報告では以上の分析から、次のようなことが結論付けられた。すなわち、楽師は王個人にとっても王国にとっても意義をもつものと考えられていたのである。君主の精神と身体は、楽師たちによる気晴らしで疲労を回復し、先祖の知恵の語りによって賢さを涵養することを通じて、君主として相応しいバランスのもとに保たれる。そして王国は、楽師の参加する祝祭や、各所で行われる楽師の語りを通じて共同体としての意識が高められ、王を中心とした強固な共同体となることができる。これら二つの側面での理想的な状態は、いずれもバランスないし調和をその根本的な特徴としている。つまり、王の心身というマイクロコスモスと王国というマクロコスモスは、楽師の技芸によって実現される一つの原理、すなわち調和に則って、よい状態に保たれると考えられていた。そこにおいて、王に抱えられる楽師はもはや虚栄の象徴や悪魔の手先ではない。14世紀以降の俗語君主鑑の流通と軌を一にして楽師へのパトロネージが拡大したことは、この楽師の有用性の認識を裏付けるものと考えられる。14世紀以降の教権の衰退と呼応して、ヨーロッパの世俗君主は王権の聖性の強調へと向かっていくが、そこではバランスに支配された完全な君主の姿を示すべく、楽師とその技芸が取り込まれていったといえるのではないだろうか。

## 参考文献

### 1. 一次史料

#### (a) 未刊行史料

Paris, Bibliothèque nationale, MS français 571, <<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84510972>> [accessed 3 Apr 2014].

#### (b) 刊行史料

*Calendar of Close Rolls.*

*Calendar of Patent Rolls.*

*A Collection of Ordinances and Regulations for the Government of the Royal Household*, London, 1790.

Frøissart, Jean, *Chroniques de J. Frøissart*, ed. by Simeon Luce et al., 15 vols, Paris, 1869-75.

---

6 Lydgate and Baugh, p. 36.

- Genêt, Jean-Philippe, ed., *Four English Political Tracts of the Later Middle Ages*, London, 1977.
- Gower, John, *The Complete Works of John Gower*, ed. by G. C. Macaulay, 4 vols, Oxford, 1901.
- Hoccleve, Thomas, *The Regiment of Princes*, ed. by Chalrs R. Blyth, Kalamazoo, 1999.
- John of Salisbury, *Ioannis Saresberiensis episcopi Carnotensis Policratici, sive, De nugis curialium et vestigiis philosophorum, libri VIII*, ed. by Clement C. J. Webb, London, 1909; repr. Frankfurt a. M., 1965.
- Lyon, Mary et al., eds., *The Wardrobe Book of William de Norwell: 12 July 1338 to 27 May 1340*, Brussels, 1983.
- Lydgate, John and Benedict Burgh, *Secrees of Old Philisoffres: A Version of the 'Secreta Secretorum'*, ed. by Robert Steele, London, 1894.
- Manzalaoui, M. A., ed., *Secretum Secretorum: Nine English Versions*, Oxford, 1977.
- Migne, Jacques-Paul, ed., *Patrologia cursus completus, series latina*, 221 vols., Paris, 1844-64 (*Patrologia Latina Database* <<http://pld.chadwyck.co.uk.ez.wul.waseda.ac.jp/>> [accessed 15 Apr 2014]).
- Myers, A.R., *The Household of Edward IV: the Black Book and the Ordinance of 1478*, Manchester, 1959.
- Robbins, Rossell Hope, ed., *Historical Poems of the XIVth and XVth Centuries*, New York, 1959.
- Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, in *Opera omnia, iussu impensaue Leonis XIII. P.M. edita*, Rome, 1882- (*Corpus Thomisticum* <<http://www.corpusthomisticum.org/index.html>> [accessed 15 Apr 2014]).
- Steele, Robert, ed., *Three Prose Versions of the Secreta Secretorum*, London, 1898.
- Thomas of Chobham, *Summa Confessorum*, ed. by F. Broomfield, Louvain, 1968.
- Trevisa, John, *The Governance of Kings and Princes: John Trevisa's Middle English Translation of the De regimine principum of Ægidius Romanus*, New York, 1997.
- Walsingham, Thomas, *Chronicon Angliae ab anno domini 1328 usque ad annum 1388*, ed by Edward Maunde Thompson, London, 1874; repr. Wiesbaden, 1965.

### (c) 史料翻訳

- アリストテレス『政治学』牛田徳子訳、京都大学学術出版会、2001年
- トマス・アクィナス『神学大全』第22冊、渋谷克美訳、創文社、1991年
- 『君主の統治について——謹んでキプロス王に捧げる』柴田平三郎訳、慶應義塾大学出版会、2005年／岩波文庫、2009年
- ジョン・ガワー『恋する男の告解』伊藤正義訳、篠崎書林、1980年

## 2. 二次文献

- Baldwin, John W., *Masters, Princes and Merchants: The Social Views of Peter the Chanter and His Circle*, 2 vols, Princeton, 1970.
- , 'The Image of the Jongleur in Northern France around 1200', *Speculum*, 72 (1997), 635-663.
- Bowles, Edmund A., 'Instruments at the Court of Burgundy (1363-1467)', *The Galpin Society Journal*, 6 (1953), 41- 51.
- Bullock-Davies, Constance, *Menestrellorum Multitudo: Minstrels at a Royal Feast*, Cardiff, 1978.
- , *Register of Royal and Baronial Domestic Minstrels 1272-1327*, Woodbridge, 1986.

- Casagrande, Carla, and Silvana Vecchio, 'Clercs et jongleurs dans la société médiévale (XII<sup>e</sup> et XIII<sup>e</sup> siècles)', *Annales*, 34 (1979), 913–928.
- Chambers, E. K., *The Medieval Stage*, 2 vols., Oxford, 1910.
- Clouzot, Martine, 'Le fou de cour ou le miroir du prince: Le personnage du fou à la cour de Bourgogne à la fin du Moyen Age', in *Château et divertissement: Actes des Rencontres d'Archéologie et d'Histoire en Périgord les 27, 28 et 29 septembre 2002*, ed. by Anne-Marie Cocula and Michel Combat, Paris, 2003, pp. 19–41.
- , 'Un intermédiaire culturel au xiii<sup>e</sup> siècle: le jongleur', *Bulletin du centre d'études médiévales d'Auxerre*, Hors série (2008) <<http://cem.revues.org/index4312.html>> [accessed 22 June 2012].
- , 'Musique et performance d'un miroir princier : Jongleurs et menestrels dans le roman d'Alexandre d'Oxford', in *Lingua mea Calamus scribae : mélanges offerts à madame Marie-Noël Collette par ses collègues, étudiants et amis (Etudes grégoriennes, 36)*, ed. by Sainier Danier, Livljanic Katarina and Cazaux-Kowalski Christelle, Solesmes, 2009.
- , '«La musique, un art de gouverner» Jongleur, ménestrels et fous dans les cours royales et princières du XII<sup>e</sup> au XV<sup>e</sup> siècle (France, Bourgogne, Angleterre, Empire germanique)', *Mitteilungen der Residenzen-Kommission der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen*, 17.2 (2007a), 15-22.
- , 'Musique, savoirs et pouvoir à la cour du prince aux XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles', in *La place de la musique dans la culture médiévale: Actes du colloque organisé à la Fondation Singer-Polignac le mercredi 25 octobre 2006*, ed. by Olivier Cullin, Turnhout, 2007b, pp.115-37.
- , 'Le son et le pouvoir en Bourgogne au XV<sup>e</sup> siècle', *Revue historique*, 3 (2000), 615–628.
- Coleman, Janet, *English Literature in History 1350-1400: Medieval Readers and Writers*, London, 1981.
- Coleman, Joyce, 'Interactive Parchment: The Theory and Practice of Medieval English Aurality', *The Yearbook of English Studies*, 25 (1995), 63–79.
- , *Public Reading and the Reading Public in Late Medieval England and France*, Cambridge, 1996.
- Conklin, Rosalind, *Medieval English Minstrels, 1216-1485*, PhD diss., University of Chicago, 1964. (unpublished)
- Dobozy, Maria, 'The Many Faces of the Medieval Court Minstrel in England and Imperial Germany', in *In hôhem prise. A Festschrift in Honor of Ernst S. Dick*, ed by Winder McConnell, Göttingen, 1989, pp. 31–43.
- Duffin, Ross, W., 'International Influences and Tudor Music', in *A Companion to Tudor Literature*, ed. by Kent Cartwright, Chichester, 2010, pp. 79-94.
- Faral, Edmund, *Les jongleurs en France au Moyen Age*, Paris, 1910; repr. 1964, 1987.
- Graßnick, Ulrike, *Ratgeber des Königs: Fürstenspiegel und Herrscherideal im Spätmittelalterlichen England*, Köln, 2004.
- Green, Richard Firth, *Poets and Princepleasers: Literature and the English Court in the Late Middle Ages*, Toronto, 1980.
- Hartung, Wolfgang, *Die Spielleute im Mittelalter: Gaukler, Dichter, Musikanten*, Düsseldorf, 2003. (ハルトウング, ヴォルフガング『中世の旅芸人——奇術師・詩人・楽士』井本响二・鈴木麻衣子訳、法政大学出版局、2006年)

- Limon, Jerzy, *Gentlemen of a Company: English Players in Central and Eastern Europe, 1590-1660*, Cambridge, 1985.
- McGee, Timothy, 'The Fall of the Noble Minstrel: The Sixteenth-Century Minstrel in a Musical Context', *Medieval and Renaissance Drama in England*, 7 (1995), 98-120.
- Michael, M. A., 'A manuscript wedding gift from Philippa of Hainault to Edward III', *The Burlington Magazine*, 127 (1985), 582-599.
- Mitchell, J. Allan, 'John Gower and John Lydgate: Forms and Norms of Rhetorical Culture', *A Companion to Medieval English Literature and Culture c.1350-c.1500*, ed. by Peter Brown, Malden, 2007, pp. 570-584.
- Olson, Clair C, 'The Minstrels at the Court of Edward III', *Proceedings of Modern Language Association*, 56 (1941), 601-612.
- Orme, Nicholas, 'The Education of the Courtier', in *English Court Culture in the Later Middle Ages*, ed by V. J. Scattergood and J. W. Sherborne, London, 1983.
- , *From Childhood to Chivalry: The Education of the English Kings and Aristocracy 1066-1530*, London, 1984.
- Owst, G. R., *Literature and Pulpit in Medieval England*, 2nd edn., Oxford, 1961.
- Page, Christopher, *The Owl and the Nightingale: Musical Life and Ideas in France 1100-1300*, London, 1989.
- Peters, Gretchen, *The Musical Sounds of Medieval French Cities: Players, Patrons, and Politics*, Cambridge, 2012.
- Putter, Ad, 'Middle English Romances and the Oral Tradition', in *Medieval Oral Literature*, ed. by K. Reichl, pp. 335-51.
- Rastall, Richard, 'The Minstrels of the English Royal Households, 25 Edward I-1 Henry VIII: An Inventory', *RMA Research Chronicle*, 4 (1964), 1-41.
- , 'Minstrelsy, Church and Clergy in Medieval England', *Proceedings of the Royal Musical Association*, 97 (1970), 83-98.
- , 'Pipers and Waits in the English Royal Households, c1290-1475: Issues of Identity and Function', 2007  
<<http://www.townwaits.org.uk/essays/piperswaitssh.pdf>> [accessed 3 August 2013].
- , *Secular Musicians in Late Medieval England*, PhD diss., Manchester University, 1968  
<<http://www.townwaits.org.uk/richardrastall.shtml>> [accessed 15 Apr 2014].
- Reichl, Karl, ed., *Medieval Oral Literature*, Berlin, 2012.
- , 'Orality and Performance', in *A Companion to Medieval Popular Romance*, ed. by Raluca L. Radulescu and Cory James Rushton, Woodbridge, 2009, pp. 132-49.
- Scattergood, V. J., 'Literary Culture at the Court of Richard II', in *English court culture in the later Middle Ages*, ed by V. J. Scattergood and J. W. Sherborne, London, 1983.
- Southworth, John, *The English Medieval Minstrel*, Woodbridge, 1989.
- Taylor, A, 'Fragmentation, Corruption, and Minstrel Narration: The Question of the Middle English Romances', *The Yearbook of English Studies*, 22 (1992), 38-62.
- , *The Songs and Travels of a Tudor Minstrel: Richard Sheale of Tamworth*, Woodbridge, 2012.
- Tout, T. F., *The Place of the Reign of Edward II in English History*, Manchester, 1914.

Vale, Malcolm, *The Princely Court: Medieval Courts and Culture in North-West Europe*, London, 2001.

Wathey, Andrew, *Music in the Royal and Noble Households in Late Medieval England: Studies of Sources and Patronage*, New York, 1989.

Wilkins, Nigel, 'Music and Poetry at Court: England and France in the Late Middle Ages', in *English court culture in the later Middle Ages*, ed by V. J. Scattergood and J. W. Sherborne, London, 1983.

Wright, Laurence, 'The Role of the Musicians at Court in Twelfth-Century Britain', *Art and Patronage in the English Romanesque*, London, 1986, pp. 97-106.

Zaerr, Linda Marie, *Performance and the Middle English Romance*, Woodbridge, 2012.

上尾信也『楽師論序説——中世後期のヨーロッパにおける職業音楽家の社会的地位』国際基督教大学比較文化研究会、1995年

甚野尚志『十二世紀ルネサンスの精神——ソールズベリのジョンの思想構造』知泉書館、2009年

ストロング, ロイ『ルネサンスの祝祭』上・下、星和彦訳、平凡社、1987年

ブロック, マルク『封建社会』新村猛他訳、みすず書房、1973-77年